

---

# Re-die ～ 生と死を担う青 ～

瀬見尾津凧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Re - die 〜生と死を担う青〜

### 【Nコード】

N2138S

### 【作者名】

瀬見尾津風

### 【あらすじ】

特別なクエストが起こった場合にのみ発生する、ゲーム世界への移動。そこでは自分自身の身体がプレイヤーキャラクターとなり、動かなければならない。元の世界へ戻る方法は、クエストを達成すること。伝説のプレイヤーにいな案内を受けて、初心者桐生とシオは「Re - die」という名のクエストへ挑む。

## 1・スタートチュートリアル

くだらないと思いながらウィンドウを閉じた。

別のボタンをクリックして、別のゲームを始める。数分後、チュートリアルが終わると再び「クソゲーだ」と、呟いて、ウィンドウを閉じる。

「……つまんねえ」

同じことを何回も繰り返しては、娯楽を求めてインターネットの世界をさまよう。

カチカチとクリックし、時折キーボードを叩く。

機械的な音だった。

「……ふうん」

独り言。

新しいウィンドウが開かれて、ゲーム画面が現われた。

スタートボタンをクリックし、おなじみのチュートリアルに突入する。

カチ、カチ、カチ……ただの暇つぶし、くだらない時間稼ぎ。あとで頭が痛くなると分かっているけど、彼は、画面から離れることをしなかった。

\* \* \*

桐生：はじめまして^^

にいな：よろですー

桐生：初心者なんで、全然分からないんだけど・・

シオ：あ、うちもそうですよー

にいな：つつか、このゲームやってるひとってほとんどROOM  
てるwww

桐生：そーなんですかw

にいな：わからないことあったらおしえたげるよ

桐生：ありがとうございます^^

\* \* \*

彼はよく考える。

繰り返される変わり映えのない毎日が、突然非日常に変わることを。そして、その非日常の中で毎日、刺激的な暮らしをすること。ありえないからこそ、彼はそんな夢を見ていた。その夢を擬似的にでも体験したくて、ゲームを漁った。

\* \* \*

シオ：チュートリアル終わりました？

桐生：終わりましたよ

にいな：じゃあ、さっそく町の外に出ないと

桐生：出ました

シオ：あ、じゃあ先の方で待ってますね

にいな：初心者二人でだいじょうぶ？w w w

桐生：モンスターはざこばっかでしょ？

桐生：あ、シオs見つけました

シオ：わーい、じゃあ友録しましょう

桐生：はい^^

にいな：クラスはなに？

桐生：シーフです

シオ：プリーストw

にいな：ああ、それだと確実に死ぬねw w w w w

桐生：え？w w w

\* \* \*

「だって、最初のボスがラスボスだから」

にやにやと笑いながら、彼女は打ち込んだ文字を送信する。

数秒の後に返ってくる初心者たちの返信に、彼女は笑い声を上げた。

「ちゃんとチュートリアル読んだの？ これはそーいうゲームなのよ」

再び指を動かして、彼女は文字を打ち込み始める。

\* \* \*

桐生：にいなs、助けてくださいよw

にいな：無理wwwあたし今、遠いところにいるからwww

シオ：せめてファイターかナイトがいれば良いんですけど

桐生：レベルどんなにあげても？

にいな：無理だねwww

\* \* \*

画面を見つめて呆然とする。

彼は「マジでくそだ」と、呟いて、やめる意志を固めた。始まってすぐに死ぬゲームなんてつまらない。

先ほどからやけにサバーが軽いと思ったら、プレイしている人が少ないからなのだ。何人かのプレイヤーの姿はあるが、どれも低レベルじゃないか。

すぐにキーボードを叩き始めた彼だったが、投稿する寸前に目を疑った。

\* \* \*

Re-die：今から首つって、死ぬ

にいな：またあんたかw

シオ：知り合い？

にいな：つてゆーか、亡霊？ w w w

にいな：あ、準備しといてね w これからしばらく落ちれないから  
w w w

シオ：え？？

\* \* \*

画面がプツツと真っ黒になった。

停電かと思つて室内を見渡すが、電気は相変わらず点いていた。  
彼女はほつと息をつくと、パソコンの電源を入れようと手を伸ばした。

その直後、画面に現われたのは燃えるような灼熱の大地 砂漠  
だった。

砂漠に立っているのは自分のプレイキャラクターと、先ほど友達  
になったばかりのキャラクター。

「……え、どういうこと？」

学校の友人に誘われて始めたゲームは、それまでのゲームとは何  
かが違つていた。

\* \* \*

桐生：どうしたらいいんでしょう？

シオ：さあ？

シオ：とりあえず、歩いてみましょうか？





意識が薄れていく。  
何なんだ、このゲーム。

## 2・クエスト開始

「桐生さん、ですよね？」

「……え、あ、ああ」

目を覚ますと、高校生くらいの少女の姿が見えた。  
彼は起き上がって周囲を確認する。

「……あれ、ここって」

「砂漠、です」

彼は少女の顔を見た。

「えっと、君は？」

「シオです。本名は、滝崎詩織」

嘘だろ、信じられない。

「お、オレは……桐生星一」

名乗り返す彼だったが、動揺していた。

シオと名乗る少女は春らしい格好をしており、あの世界からこの世界へと、そのままの姿で来てしまったことが分かる。

桐生もまた、Tシャツにジーンズというラフな格好をしていた。

「何か、変ですよ。さっきまでやっていたゲームの中に入っちゃうなんて」

「……やっぱりそうなのか」

桐生は頂垂れた。こんなことになるなら、さっさとやめていれば良かった。

「でもやっぱり、ゲームなんでしょうね。砂漠なのに、熱くないですし」

シオの言葉にはっとした。言われてみれば、熱くない。風が吹いているらしいことは体感で分かるが、照りつける太陽の熱さがまったく伝わってこないのだ。

「困ったな」

「困りましたね」

二人は途方に暮れた。

初心者である二人には、今の状況を理解し受け入れるのが精一杯で、起こすべき行動が思いつかない。

さくつと踏みしめる砂の大地、桐生は息をつく、その辺を適当に歩き回った。先ほどのようにワープできるかもしれない。

「あの、桐生さん？」

ざくざくと歩き回って、怪しいところは念入りに探る。

「無駄だと思います、桐生さん」

「は？」

ムカツと来て、桐生はシオを振り返った。

シオはびくつとしながらも、彼へ言う。

「うちもさっき、探しましたから。何も、見つかりませんでした」

「……クソッ」

何てことだ。

「せめて、にいなさんに会えたら良いんですが……」

と、俯くシオ。

桐生は少し思考すると、彼女へ背を向けた。

「とりあえず歩こう。街が見えるかもしれない」

「あら、あんたがこの時間にいるなんて珍しいじゃない」

にいなはミネラルウォーターの瓶を片手に、青年の向かいへ腰を下ろした。

「バイト、やめたからな」

「じゃあ二ート？ また？」

と、おかしそくに笑い出す彼女。高校生のようにも、大人のようにも見える外見は相変わらず世間離れしていた。

青年は呆れたようにして、言った。

「で、今回の参加人数は？」

「とりあえず十三人ね。その内の二人は初心者よ」  
にいなは瓶に口を付けた。

「じゃあ、ここまで来られるかが問題だな」  
「そうね」

青年の杞憂にも構わず、にいなはミネラルウォーターを飲む。

「……えーと」

「も、モンスターですね」

「かわいいけどな」

と、かがみ込む桐生。

二人の前に立ちはだかるのはネズミ型の小さなモンスターだった。あまり強そうには見えないが、その口には鋭い牙が生えている。

「危ないですよ、桐生さん！」

シオが止めるのを無視して、彼はモンスターに手を伸ばした。

「ほらほら、かかってこいよ」

モンスターはしばらく彼の様子をうかがっていたが、やがて口を大きく開けてかみつこうとした。

「おっと」

間一髪かわして、左足でモンスターの脇腹を蹴る桐生。  
モンスターは鳴き声を上げて遠くへ飛ばされていった。

「やっぱ雑魚だったな」

「き、桐生さんって、勇気あるんですね」

と、胸をなで下ろして苦笑いをするシオ。

桐生は何の言葉も返さずに、再び歩き始めた。

続々と集まってくるプレイヤーたち。

老若男女、さまざまだ。

「にいなさーん」

人懐こい笑みを浮かべて近づいてきたのは、小学生くらいの少女だった。

「遅かったのね、うーたん」

「そうなんです。うー、今日はちょっと道間違えちゃって」

えへへ、と笑う少女うー。

「ってことは、あとは初心者の二人だけか」と、青年が呟く。

「あれー、初心者さんが二人もいるんですかあ？」

うーが首を傾げると、にいながにやつと笑った。

「そうなのよ。まあ、待つだけ無駄でしょうけどね」

歩き始めて何分が過ぎただろう。

「シオ、今何時だか分かる？」

桐生の問いに、シオは首を振った。

「ごめんなさい、分かりません」

その左手首には腕時計がはめられていたが、針は止まっていた。

桐生は舌打ちをすると、また前を向いて歩き続ける。

その後をはぐれないよう、必死で付いていくシオ。

ゲームの中だけあって、太陽は未だに沈まない。

吹いてくる風は温く、どこか機械的で気持ち悪さを覚えた。

足元は相変わらず砂、砂、砂。草の一本も生えていない、ただの

人工砂漠だ。

「どうしたら、帰れるんでしょう？」

ふと呟いたシオに、桐生が問いを投げかける。

「何お前、帰りたいの？」

「え……か、帰りたく、ないんですか？」

「ないね」

言い切る桐生に、シオは困惑した。確かに異世界への憧れはあったが、出口の見えない世界は嫌だ。

「うちは、いつもの日常が、すごく懐かしいです」

「オレにはそんなのない。あるのは、変わらない毎日だ」

歩き続ける彼の背中が、ふと寂しく思えた。

シオは彼の隣へ立つと、横顔へ声をかけた。

「聞いても良いですか？」

「何を？」

「桐生さんは、いったいどんな人なのか」

彼がちらつと彼女を見て、困惑するように空を仰いだ。

「年は十六、職業は引きこもりだよ。中二の時から部屋に引きこもって、毎日パソコンしてた」

「じゃあ、うちの方が一つ年上ですね。うちは女子校に通ってた」

「……ふうん」

改めて互いを見合い、ほぼ同時に視線を逸らす。

「女子校って、本当にいるの？ その……レスビアンとか」

桐生がそう尋ねると、シオは苦笑いを浮かべた。

「どうでしょう、うちの周りにはいませんでしたし……噂くらいならありますけど、真実かどうかは分かりません」

「そうか……」

と、桐生は口を閉ざした。十六歳にしては大人びている彼だったが、中身は年相応の少年のようだ。

シオはにこつと微笑んで、同じように口を閉じて歩いた。

「というわけで、今回は十一人でやるわけだけど……バランス悪いわね」

「クレリックがお前だけっていうのが不安だな」

「あんたは黙ってて、青龍」

と、にいなが冷たく言い放つ。

青龍と呼ばれた青年は口を閉じると、カウンターへ向かって行った。

九人に囲まれて、にいなが再び大きな声を上げる。

「みんな分かっているとと思うけど、目的はRe-dieの救出よ。このクエストが一番面倒なんだけど、要領は分かっている？」

「あ、自分は今回が初めてなんで、ちょっと足手まといになるかも」と、口を開いた少年ににいなは問う。

「クラスは？」

「ナイト、レベルは一応22あるよ」

面子を確認して、にいなは彼へ言った。

「じゃあ、うーさんに支援してもらって前線行きなさい。ただし、一番奥に行けるのはシーフかアサシンだから注意してね」

「了解。うーさん、よろ」

「よろしくねえ、ソレイユさん」

にこにこと挨拶を交わす少年と少女。

その他のメンバーは、にいな顔見知りだった。そのため、言わずとも要領は分かっているはずだ。

「じゃあ、そういうわけで準備が出来たら行くわよ」

と、にいなは奥に位置する扉を指さした。

「う、うそ……マジで？」

「マジだな、宿屋だ」

前方に見えてきた建物に、桐生とシオは目を疑った。

何度瞬きをしても、目をこすっても、それはそこに在った。

「行くぞ、シオ！」

「え、ちよつと待って！」

走り出した桐生を追って、シオも全速で走り出す。

### 3 パーティを組む

ばたんと開かれた入り口の扉、現われた姿にいなは驚いた。

「嘘、本当にたどり着くなんて」

桐生は状況を把握していないのか、入ってくるなりその場に座り込んだ。

「あー、疲れた……っつか、何だここ？」

「宿屋ですよ」

と、彼へ歩み寄るうー。

「宿屋って……」

一同の注目を集めて、桐生は居心地が悪くなってきた。  
すると、シオがようやく中へ入ってくる。

「やっと着いた……えっと、あれ、みなさんこんなところで  
と、シオははつとする。」

「もしかして、ここが出口なんですか!？」

「違うわ、入り口よ」

と、即答するにいな。困惑するシオと桐生に近づいて、彼らへ尋ねた。

「桐生とシオで間違いないわね？」

「お、おう」

「そうです、うちがシオです」

ざわめく一同を目で制し、にいなは状況を説明する。

「あたしがにいなよ、覚えてるでしょう？ それで、これからあた  
したちは Re - die の救出へ行くところなの。それをクリアでき  
ればここから脱出できるわ。でも、初心者のおんたたちは付いてく  
るだけにしなさい。足手まといになるから」

「……ど、どういうことだよ？」

「さっき言った通りよ。死んでも脱出は出来るけど、どうせなら気  
持ちよく出て行きたいでしょう？」



と、冷めた目を向けるにいな。

桐生はシオと目を合わせた。

「脱出、って……」

「う、うちは行きます！　だって、ここから出たいもん！」  
にいなが満足げに頷く。

「言っておくけど桐生、ずっとここにいたってタイムアウトで弾かれるだけよ。大丈夫、あたしと青龍がいれば安全だから」

と、カウンターでミネラルウォーターを飲んでいる青年を指さす。  
「人を指さすなって」

「ぼやく青龍だが怒ってはいなかった。」

「がちゃがちゃとその他のメンバーが各々の準備を再開させ、桐生は曖昧に頷いた。」

「分かった」

「うーの装備、あげるですう」

と、ウィザードのうーがシオへ初心者用装備を手渡した。

先ほどまでは普通の服を着ていたはずなのに、いつの間にかシオはプリーストの初期装備を身につけていた。

「あ、ありがとうございます」

受け取った装備は使い古されている様子だったが、まだ耐久度は残っている。

「いえいえー。うーたち魔術士系は、基本的に後方支援しか出来ないから、モンスターの不意打ちさえ食らわなければ死なないですよ」

「そうなんですか……」

シオはこれから起こる出来事に、不安を覚えずにはいらなかった。

一方の桐生は、にいなにアサシンの青龍を紹介されていた。

「こいつが青龍、あたしと並ぶ伝説のプレイヤーよ」

軽くにいなを睨む青龍。すぐに桐生へ目を向けて呟いた。

「あー、悪いな。初心者用装備、全部倉庫に入れっぱなしだわ」

「はあ！？ 使えない奴ね、あんたは」

青龍を怒鳴るにいなと、適当に謝る青龍。

すっかり置いてけぼりにされ、桐生は呆然と二人を眺めていた。

「あ、でも…… ちょっとステータス見せて」

と、青龍。

「え？」

首を傾げる桐生を見かねて、にいなが彼の胸を叩いた。ぶわっと浮かんだステータス画面。

青龍はそれを確認すると、言った。

「レベル上がってるな」

「……え？」

と、再び首を傾げる。まったくついていけない桐生だが、構わずに青龍は装備品を取り出した。

「お前に貸してやるよ、シーフ専用の特別装備セット」

「あ、それってまさか、ベータ版時代の最強装備！？」

にいなが目が輝いた。

「そうそう、これ店売り不可だし、見た目気に入ってたから常備してたんだ」

と、得意げに言う青龍。

「武器も欲しいなら、ダガーやるよ」

「あ、ありがとう」

桐生がそれらを受け取ると、にいなが再び彼の胸を叩いた。ずっと表示されていたステータス画面がぱっと消えて軽くなる。

「さあ、さっさと装備しちやいなさい。それ、無理に返さなくても良いから」

と、にいなが笑う。

「駄目だったの、ちゃんと返せよ」

「え、あ、うん……」

桐生はどきまぎしていたが、同時にわくわくし始めていた。これ

から起こる出来事は、きつと素晴らしい非日常だ。

桐生とシオの準備が整うと、いながあの奥に位置する扉の前へ立った。

「さあ、行くわよ」

一同がそれぞれに頷いて、いながの手が扉を開く。

宮殿の回廊のような場所だった。

くすんだ青でまとめられた壁に床、所々に見られる装飾も青い。

「ちなみにこのクエスト、何ていう名前か知ってますかあ？」

ふいにうーがシオへ話し掛けた。

「え、何て名前なんですか？」

「Re - die、別名繰り返される死」

にこにこしながら紡がれる言葉に、シオは思わずドキツとした。

「朽ちた宮殿の広間で自殺を図る女の子を、うーたちプレイヤーが助けに行く話なんですよう」

「……な、なるほど」

世界観が暗く鬱々としているのは知っていたが、さすがに小学生の口から聞かされると怖い。

しかし、うーは構わずににっこり笑っているだけだった。

しばらく歩いて行くと、戦闘にいたになが立ち止まった。

「モンスター出現！」

ばばつとそれぞれの位置へ付く一同。桐生とシオは一番後ろで魔術師達に守られていた。

ナイトのソレイユがゾンビと化した兵士を斬りつけ、よどんだ返り血を浴びる。

「うわっ、思ったよりもきついな」

「がんばるですう、ほらっ！」

と、うーがソレイユへ攻撃力アップの魔法をかけた。

それからファイターたちが連携技を繰り出して相手の戦力をそい

でいく。

桐生もシオも、目の前で繰り広げられる光景に、呆然とするしかなかった。

兵士の首が飛び、血が溢れ、動かなくなる。

「……Re - die」

それは悲しい少女の物語。

\* \* \*

宮殿に住む少女の名はリダ。

侍女として王家に仕える母と国王の間に生まれた、いわゆる妾の子だった。

ある時、宮殿に隣国からの遣いが訪れた。

遣いは国王へ言う。

「条件を受け入れてもらえないのであれば、戦争は免れないでしょう」

国王は唸った。

「少し、考えさせてくれ」

求められたのは王女の身柄であった。王女を渡せば国に攻め入らないが、そうでないのなら戦争を起こす。

一晩考えて、国王はリダとリダの母が暮らす部屋を訪れた。

「リダには王女の代わりとなつて、隣国へ行つてもらう」

「何故です、陛下！ リダは、リダは私の大切な」

圧倒的な権力によつて国王に奪われたリダ。

隣国の遣いは、綺麗な衣装を身に纏つたリダを王女と信じ込んだ。しかしリダは国を離れたくなかつた。

事が起きたのは出発前夜、リダの元に黒き魔女が現われたのだ。

「王を憎いと思うかい？ 自分と母親を引き離した国王を、許せないのかい？」

リダは返した。

「いいえ、許せないことはありません。だって、そうすることで王様が平和に暮らせるのなら」

魔女は言った。

「王女はあんたのことなんか知ったこっちゃないよ。誰もあんたのことなんか気にかかけちゃいない」

「嘘」

「本当さ。リダ、あんたは捨てられたんだよ。王はあんたを鬱陶しいと思っていた。そのあんたを隣国へ渡すことで、全て白紙にしてしまおうって言う魂胆さ」

リダは泣いた。自分は必要とされているのではなく、捨てられようとしている事実には、心の底から涙した。

そして魔女は、リダへ言う。

「可哀相なあんたに魔法を授けよう。それを使って、好きなように世界を作りかえると良い」

「ありがとう、魔女のおばあさん」

#### 4・クエスト達成

翌朝、リダは迎えに来た国王を魔法の力で殺害した。騒々しくなる宮殿の中、リダは次々に人を殺していった。そして、リダはようやく目が覚める。

目の前に転がっているのは一人の女性、母親だった。

「きゃあああああああああああ！！！！」

悲鳴を上げて、リダは魔女の声を聞く。

「哀れなリダ、わたしが楽にさせてあげようか？」

それは隣国から送られてきた魔女だった。最初から、隣国はこうするつもりでいたのだ。

リダは 頷いた。

\* \* \*

あまりの恐怖に、足がガクガクと震えていた。

「シオ！」

倒れそうになる彼女を桐生が支える。

「っ、ごめんなさい……何か、気持ち悪くなっちゃって」

彼女の顔はすっかり青ざめていた。

こんなひどいクエストを、にいなやうーや、青龍たちは淡々とこなしていく。

桐生は彼女の背に腕を回すと、優しい声で言った。

「大丈夫、オレもだから」

「……桐生さん」

そして、みんなに置いて行かれないよう、二人は精一杯、後を追った。

「さあ、ここからが本番よ！」

にいなが楽しそうに叫ぶ。

「さっさと終わらせるから待ってな」

と、青龍。

「雑魚は任せるですう」

うーもどこか楽しそうに言って、桐生とシオは息をついた。

立ちほだかる大きな扉を開けると、祭壇が見えた。

その上に一人の少女が立っている。ロープを首にかけた、その状態。

「青龍！」

「分かつてる！」

にいなが光属性の最高魔法を唱えた。視界いっぱい光が広がり、その間に青龍が少女の元へ向かう。

しかし、あと少しの所で青龍はモンスターに足を取られた。

「くそつ、何だこいつら」

床に転がり抵抗する青龍。

そこへうーが風の魔法を唱えた。

「うーに任せるですう！」

切り裂く音で青龍に襲いかかっていたモンスターが八つ裂きにされる。

「サンキュー、うー！」

「いえいえー」

再び走り出した青龍だが、今度は魔女が現われ、行く手を阻まれた。

「そいつはあたしに任せてっ」

と、にいなは雷属性の魔法を唱え、魔女の動きを鈍くさせる。

魔女の隙について前進し、祭壇へ上る青龍。

その他の雑魚モンスターはソレイユたち前衛が必死に倒している。

桐生とシオは、ただその様子を見ていた。

青龍がアサシン特有の素早さで少女のロープを解こうとする。

魔法が飛び交い、剣が光を反射して、返り血に濡れる。

「これでどうだっ！」

青龍がロープを解くことに成功すると、魔女が呻いた。

「ぎゃあああ！ あと、あと少しだった、のに……っ」

プログラムされた定型句だ。

モンスターたちも動きを止めて、少女が青龍の腕の中で呟いた。

「ありがとう」

少女リダが目を閉じて、それからぶつと画面が真っ黒になる。

\* \* \*

桐生：何だったんだ、今の

シオ：分かりません、何か夢を見ていたような・

にいな：夢じゃないってばwww

桐生：まさか、本当に？

うー：そうですよお、本当のことですう

シオ：うーさん！

にいな：あれがこのゲームの醍醐味、体感型クエストってやつ

桐生：そんな・・・すごい

青龍：桐生、お前早く装備返せ

桐生：え？ 青龍sどこにいるんですか？



青龍：ダウンタウンの酒場だ

桐生：すぐ行きます！

にいな：w w w w w

うー：青龍さんひどいw w w w w w

にいな：で、シオ？ あんたはどうだった？

シオ：えっと・・・面白かったです

\* \* \*

装備品を青龍へ返し、桐生は文字を打ち込んだ。

『クソゲーにしか思えなかったけど、もうちょっとやってみようかな』

青龍が笑った。

『いーんじゃね？ 他にもクエストはたくさん用意されてるしな』  
桐生はモーションで頭を下げた。

『これからもよろしくお願いします』  
と、青龍へ友達登録を申請する。

青龍はすぐに許可してくれた。  
にこつと微笑って、桐生は呟いた。

「こんなクソゲー、初めてだ」  
生々しいが面白い。気持ち悪くなるが、それもゲームだと思えば

悪くはない。

『何かあつたら力になるぜ』  
『ありがとうございます^^』

\* \* \*

ゲームからログアウトして、シオは息をついた。

「はぁ……」

非現実的だった。

けれども、何故か満たされていることを認めずにはいられない。  
次に、いつあの世界へ行けるかは分からない。

シオはあまりゲームにはまりたくなかったが、たまにやるなら面白く考えていた。

そして、たまにあの世界へ行けるなら、それも良い、と。

あまりにも目まぐるしく、目を閉じるとあの出来事が一から思い出された。

「……もう一度会えるなら、良いかな」

桐生やにいな、うー、青龍……彼らにまた、出逢うことが出来るなら。

シオは納得すると、パソコンをシャットアウトさせた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2138s/>

---

Re-die ～ 生と死を担う青 ～

2011年5月19日01時25分発行